

明末清初の天童山と密雲円悟

石井修道

一 はじめに

常盤大定博士は『支那仏教史蹟踏査記』（龍吟社）に大正十一年（一九二二）十月二十二日の天童山について次のように報告されている。

薄暮、東南に向ひ、鎮麟塔の見ゆる丘にかかる。塔の下辺にあるものは、輯譲亭であろうが、下轎の余暇がない。丘を下りて天童

街に入り、更に八支里にして、巨樹道を夾む寺域に入りて、更に進む事約三支里、幽勝の区人の心を爽かならしめる。時に脚下に溪流の響あり、九日月道を照して、一步一步清浄の空気を呼吸する。我が永平寺の勝景はこの天童の風を学べる事一見して明白である。我れ支那に遊ぶ三回、多くの省を跋涉するも、未だ斯くまでに我が禪院を彷彿せしめるものに接せぬ。ここに入りて、その環境が恰も故郷に還るの思あらしめた。寺域に入れば巨池あり、南北両処に分れ、その中間に七塔があり。国清寺のに四倍するほど巨大なるものである。後に知客の僧に問へば、明末のものなりといふ。中に一個の鉄塔を交へてある。池の彼方に天王殿あり、その巨大なる事、未だ曾て接せざる所のものである。（四七〇頁）

つづいて翌朝三時より鼓鐘を聞き、参列した四時すぎの念佛行道について、

作法も、念經の態度も、音声も、南嶽のに比して決して遜色がない。時に不調和のものあるは、数の多きが為である。我れ渡支以来、如何にも仏寺に詣せるの感を以て衷心より喜んだのは、南嶽祝聖寺とこの天童寺との二所のみである。（四七二頁）

と述べられている。

鈴木大拙博士も『支那仏教印象記』（「鈴木大拙全集」卷三十所収、岩波書店）で、昭和九年の旧暦の降誕会を天童山で見られ、常盤博士とはまた別の賑いを報告されている。

道元禪師が天童山の住持長翁如淨に参ずるために遊山から再び天童山に帰ったのは、宝慶元年（一二二五）のことであるが、この天童山への参学は禪の歴史に新たな展開を与えることになったのである。嘉定十七年（一二三四）秋頃に示寂した第三十代住持の無際了派（大慧派）は、長翁如淨と親しい間柄であり、天童の後事を託すべく遺書を淨慈寺の如淨の下へと

送つたのである。道元禅師は入宋して嘉定十六年七月に最初に天童山に掛錫した時は、無際了派の住持の時であつたのである。無際示寂後、道元禅師は無際の法兄であり、天童山第二十七代の浙翁如琰に徑山で参じてゐる。再び天童山で如淨に参する時、入宋を共にした明全が、入宋後ずっと天童山に留つていたのであるから、すでに天童山は禅師にとって中国における安らぎの地ではなかつたろうか。再び天童山へ帰つた時の道元禅師の気持はどんなものであつたろうか。果して新しい住持の如淨の下で一生参学の大事を了畢し、如淨の法を嗣いで日本へ帰られ、普勸坐禪を説かれた道元禅師の遺跡が天童山である。

この度、天童山や如淨禅師の塔の存する淨慈寺を中心の中に道元禅師ゆかりの地へ行く計画が立てられ、私も参加することになつたが、現在の最も新しい天童山の報告は、常盤・鈴木両博士などの記録しか残つていなければ、天童山について一応の知識をと思い『天童寺志』を中心に天童山の歴史を概観したのが今回の論文である。道元禅師や栄西と関係の深い、日本の禅宗と切り離すことのできない場所ではあるが、当時の建築物や遺跡はほとんど残つていないので、現存する天童山建造物の基礎をつくつた密雲円悟（一五六六～一六四二）を中心にしてその活躍を見て、一応現存する天童山の建造物との関係を考察しておきたい。ただ今日の天童山といつ

ても『天童山志』や『天童統志』を参考にするわけであるから、実地調査すれば改める点も多くあるが、少なくとも天童山とは全く変つてゐる点を考えて、明末清初の天童山の経過を考察しておきたかったからである。もちろん宋元時代の歴史を抜きにしては天童山はありえないからその点も合せて概観してみた。

二 宋元時代の天童山

天童山の正確で詳しい歴代住持は不明であるが、玉村竹二博士校訂の『扶桑五山記』（鎌倉市教育委員会発行昭和三八年三月）と『天童寺志』（以下寺志と略称す。）により、第四十九代までの世代を列記すれば次のような（）は生没年代。

開山義興・一世咸啓・二世義⁽¹⁾・三世宝堅・四世懷清・五世子凝・六世利章⁽⁵⁾・七世新⁽⁶⁾・八世交⁽⁷⁾・九世清簡⁽⁸⁾（九五七～一〇一四）・十世普⁽¹¹⁾・十一世清遂⁽⁹⁾・十二世弱⁽¹⁰⁾・十三世可齊⁽¹⁰⁾・十四世資源⁽¹⁰⁾・十五世普交⁽¹¹⁾（一〇四八～一二二四）・十六世宏智正覺（一〇九一～一一五七）・十七世法為⁽¹²⁾・十八世大休宗珏（一〇九一～一二六二）・十九世應菴曇華（一一〇三～一二六三）・二十世慈航了朴⁽¹³⁾・二十一世密菴咸傑（一二一八～一八六）・二十二世雪菴從瑾（一二一七～一二〇〇）・二十三世虛菴懷敝⁽¹⁴⁾・二十四世節⁽¹⁴⁾・二十五世無用淨全（一一三七～一二〇七）・二十六世息菴達觀（一一三八～一二一二）・

二十七世浙翁如琰⁽¹⁵⁾（一一五一年一二二五）・二十八世癡鈍智穎・二十九世海門師斎⁽¹⁷⁾・三十世無際了派⁽¹⁸⁾（一一四九〜一二二四）・三十一

世長翁如淨（一一六三〜一二二八）・三十二世枯禪自鏡・三十三世晦岩大光・三十四世松岩印・三十五世雲臥榮・三十六世癡絕道冲⁽²¹⁾（一一六九〜一二五〇）・三十七世滅翁文礼⁽²²⁾（一一六七〜一二五〇）・

三十八世弁山了阡・三十九世西岩了慧（一一九八〜一二六一）・四十世別山祖智（一二〇〇〜一二六〇）・四十一世西江廣謀⁽²⁴⁾・四十二世簡翁居敬・四十三世石帆惟衍・四十四世環溪惟一（一二〇二〜一二八一）・四十五世月波普明・四十六世止泓道鑑⁽²⁷⁾・四十七世東岩淨日（一二二一〜一三〇八）・四十八世竺西妙坦⁽²⁸⁾（一二四五〜一三一五）・四十九世雲外雲岫（一二四二〜一三三四）

この世代は『扶桑五山記』に基づいたものであり、『天童寺

志』にはすべて世代が書かれている訳ではなく、十六・十九・二十五・三十八・四十・四十九が記されているのみである。

ところで以上は二つの資料が一致するが寺志において密庵咸傑⁽²⁹⁾が二十世と記録され、一世『扶桑五山記』と違っているのである。密庵が二十世と考えられたのは『密庵咸傑禪師語錄』によると思われる。

密庵咸傑が太白名山天童景德禪寺に住持する受請上堂が淳熙十一年（一一八四）の正月であるが、それ以前の乾道三年（一六七）八月一日の衢州西烏山乾明禪院、淳熙四年（一一七七）五月十日の徑山興聖万寿禪寺の住持の景德靈隱寺の開堂およ

び淳熙七年（一一八〇）八月二十九日の景德靈隱寺の開堂では、三回ともに、

此一瓣香、爇向爐中、奉為前住明州天童山景德禪師第十八代応庵和尚、用酬法乳之恩。（続藏經卷一二一〜二〇九d・二一八b・二三二a）

とあって、師の応庵曇華を十八代と考えていたからであり、曇華の示寂が一一六三年六月十三日であるから、四年後の乾道三年にすでに曇華十八代説が説かれていたことがわかる。密菴によれば、宏智以降は法為—曇華—了朴—咸傑と世代は考えられて、宗珏の世代を認めなかつたことになる。

以前に宗珏については「天童大休禪師塔銘」（『攻媿集』卷百十）で紹介したように、

（紹興）二十九年、直閣張公偁、遂以天童招之。師念太白名山、實寵智之後、一式遵規、無所更改。道俗益嚮之。

と明らかに住持している。また『兩浙金石志』卷九にも、「宋東谷無尽灯碑」は「紹興二十八年正月 日、募緣直歲僧智宣、山門監寺惠璋、住持伝法沙門法為立石」とあり、「宋故宏智禪師妙光塔銘有叙」には、「紹興二十九年七月望日、住持嗣祖灋姪比丘宗珏立石」とあって、法為や宗珏の住持が確実になるばかりか、年代も確かめることができるのである。

十七世・十八世が確実になると、もし寺志の密菴二十世を主張すれば、了朴の世代が無くなるが、後に述べるように了朴

は天童山に住すること二十年で、天童山の充実に努めた人であり、世代は『扶桑五山記』の説が一応正しいと認められる。日本で行われた脱牌については中国でまだ充分に調査していないが、考えられないでの住持世代は時に変化することがあり、『扶桑五山記』の世代数も元末に整理されたと考えられ、すべて他の資料で証明することはできない。『天童統志』は二十代密菴説により、二十五代の無用までを、21 徒瑾—22 懐敞—23 達観—24 師斎と推測し、その後三十八代弁山了阡までを、26 松窓照—27 如琰—28 智顥—29 了派—30 如淨—31 自鏡—32 大光—33 広謀—34 道沖—35 文礼—36 次庵堯—37 月窓円とつづけ、三十九世了惠—四十世祖智として、41 居敬—42 惟衍—43 惟一—44 普明—45 道鑑—46 石門来—46 浄日—47 妙坦そして雲外雲岫の四十九代を文献から推測している（アラビヤ数字は推定）。これらは寺志にみられる世代を手がかりにその間に住持した人を並べただけで、世代の数字を『天童統志』で記している。五十世以降はそれでは一体どのように住持されたか、これはまったく資料がないので、寺志でわかる世代を『天童統志』の推測で五十八世の原明元良⁽³²⁾までを考えてみよう。50世東雲仏海・51世怪石奇・52世平石如砥・53世龍門膺・54世浮中懷信⁽³⁴⁾（一二八〇—一三五七）・55世（？）・56世正宗法國・57世雪窓悟光（一二九二—一三五七）となる。その後59世了堂惟一、

木庵司聰⁽³⁵⁾（一三二二—一三八一）、寿巖智昌、用愚希顏、六十四世仁叟懷⁽³⁷⁾、湛然自性などが住し、寺志には七十世雲莊慶⁽³⁸⁾、七十一世曦菴嗤⁽³⁹⁾、七十二世無伝宗寧⁽⁴⁰⁾、七十五世大用機⁽⁴¹⁾、七十七世性空習⁽⁴²⁾の世代が記されているが、その後は不明である。七十世代の生没年は不明であるが、七十二世の無伝宗寧が洪鐘に銘を書いたのが、正統六年（一四四一）閏十一月二十七日であるから、次にこれまでの天童山について概観してみよう。この間の大きな出来事に関しては、寺志卷二の中書參政臨川の危素が撰した朝元閣の碑銘が最も簡潔に述べられているのでそれをみてみよう。

至正二十年、天童山景德禪寺、新作大閣成。宣政院臣以聞有勅賜名曰朝元閣。復三年、皇太子、命太保右丞相臣搠思監、請於上勅中書參知政事臣素、撰述碑銘、以賜刻石、垂諸永世。臣素、按慶元郡城東走四十里、有山盤互高広、若抱圓珠。晉永康中、沙門義興、廬於此山。有童子日給薪水、久而辭去曰、上帝以師篤於道行、故使以來、吾太白星也。寺經兵燼。唐開元二十年、高僧法瓈、按古跡、造精舍於山之東麓。秘書正字、万齊融、建多寶塔於精舍西南隅。法瓈日誦法華經、亦感太白星化為童子、因名其山、曰天童云。至德中、禪師曇總、來自縉雲、與禪師觀宗、徙太白峯下。乾元初、相國第五琦、請於朝、遂賜天童玲瓏寺額。宣宗時、禪師咸啓、始為十方禪刹。宋建炎中、宏智禪師正覺、創建千佛寶閣。淳熙五年、孝宗、書太白名山、贈僧了模。十四年、禪師懷敞、謀重新是閣。時日本千光法師榮西、依敞問道、乃請曰、某、為國主近屬、歸當助施材木。越二年、果至閣成。而寶祐四年、丞相崇國公

吳潛、奏請禪師祖智主之、閣再建。景定四年、禪師居敬、復作焉。歲既久復燬。大德三年、禪師淨日、益加聞於朝、賜額朝元寶閣。天曆間又燬。至正十八年、江浙行省、咨宣政院、奏起台之瑞。嵒臣僧元良、主寺事。良觀堂宇殘欠、產入寡薄、於是刻心殫力、日以興建為事。明年秋、臣左丞方國珍、捐己資助工物、未踰年而落成。（以下略）（一一丁ab）

五十八世の原明元良について記したもので、元良は至正二十年（一二六〇）に善覺普光禪師の号を賜つた密庵咸傑—松源崇岳—滅翁文礼—竺元妙道—別源法源と承ける臨濟宗の人である。天童山の百廢を挙し、至正十年に新しく作った大閣に朝元閣の賜額を受け、危素に賜碑を撰せしめた時の記録がこれに当り、至正二十三年に書かれたものである。この記録は樓鑰が書いた虛庵懷敵⁽⁴³⁾と栄西による千仏閣重建の記録である『天童山千仏閣記』（『攻媿集』卷五十七・寺志卷二）を踏襲したことを見出しているが、『天童山千仏閣記』にとりあげられた人は、義興・宏智正覚・慈航了朴・虛庵懷敵の四人であり、天童山史において活躍した重要な人達が危素の碑銘と共に考えれば自然に理解できる。天童山の古天童に十尊宿の木像があるとされるが、常盤博士はその十人は義興・宏智・孚中・大用などとしか報告されていないので、すべてわからぬし、また明の七十五世の大用機の業蹟も詳細は不明である。

危素の碑銘の内容について補足していくことにしておこう。天

童山の開山は義興で、晋の永康中（三〇〇～三〇一）に此の山に庵を結んだことに始まる。太白天童の由来は樓鑰の記すところと同じで、義興が庵を結んだとき、童子がやつて来て薪水を給し、大衆がやつてきて童子の役目が終つたので童子が去るときに「吾は太白一辰なり、上帝、師の道行篤きを以つて、左右に侍せめた」といつて、忽ちに見えなくなつた、というのに因んで名づけられたといわれている。開山の塔は清初に道恣が重建したものである。唐代になり開元二十二年（七三三）に法瓈が精舎を建てたことや太白天童の名の由来が再び伝えられ、『仏祖統紀』卷四十には異つた説を伝えている。ついで万斎融が多宝塔を建てたとされる。至徳中（七五六～七八）に曇総や觀宗が太白峯の下に移つて來た。太白峯下が新天童のあるところである。觀宗は牛頭系の人である。乾元二年（七五九）に相國第五琦が請うて天童玲瓏寺の額を賜わつた。次に天童山の第一世となつたのは咸啓で、洞山良价の弟子とも、徑山鑒宗の弟子ともいわれてゐる。大中元年（八四七）の咸啓住持の時、天童玲瓏寺が十方禪刹となつたのである。咸通元年（八六〇）にも咸啓は紫衣一襲を賜つたと伝えられるから、長く天童山に住していいたと思われる。ここに禪刹としての出発をみてよいであろう。その後咸通十年（八六九）に天寿寺と名を賜り、景德四年（一〇〇七）に景德寺と寺額を賜わつたのである。

天童山の名を今日高からしめたのは、十六世宏智正覚であろう。建炎三年（一一二九）より示寂の年の紹興二十七年（一五七）の約三十年の住持は天童山の歴住では他に類をみたい長期間であり、師資で住持を受け継いだのも最初で、宏智の弟子の法為が十七代となつて、天童山の充実に力を尽している。宏智が入寺した頃の天童山は荒廃していたのであって、王伯庠は「勅諡宏智禪師行業記」に次のように伝えている。

建炎三年秋、渡江至明州、欲泛海礼補陀觀音、道由天童山之景德寺。適欠主者、衆見師來、密以告群。師微聞即遁去。大衆因繞通夕不得行。不得已而受請、未幾膚人侵犯境内。諸寺皆謝遣雲游。師獨來者不拒。或以為不可、師喻之曰、明日寇至、寺將一空、即今幸其尚為我有、可不與衆共之乎。已而寇至、登塔嶺以望、若有所見、遂斂兵而退、秋毫無所犯、人皆歎服、以為神助。（大正藏卷四八一一〇b）

このような世情の時に寺の荒廃を、王伯庠の表現をかりるならば、「新ならざる者なし」といわれるほど天童山を一新した。紹興四年（一一三四）に落成した僧堂については宏智自ら『僧堂記』を撰している。その他の主な建造物については、周葵の塔銘に

其任天童、前後凡三十年、寺為一新、即三門為大閣、廣三十楹、安奉千仏。又建廬舍那閣、旁設五十三善知識。燈鑑相臨、光景互入。觀者如游華藏界海、所以輝耀塵世、使生厭離、以發起善根、而僧堂衆寮臥具飲食器用、所以處其徒者、亦皆精微華好、如寶坊

化城。即浜海之隙、障其鹹鹵、而畊之以給僧供、末年至不發化人、而齋厨豐滿、甲於他方。（寺志卷七および続藏經卷一二四一四五五a b）

とあり、樓鑰も『天童山千仏閣記』に、二大池があり、その中に七塔が建てられ、池の中に倒に影じた樓閣のすばらしさをたたえている。常盤博士も七塔について報告されているが、もちろん宏智創建のものではない。ただ天童山をおとずれる人の最初の驚きを感じることができる。示寂後紹興二十八年（一一五八）宏智禪師の諡号を賜い、塔号を妙光之塔といい、宏智の墓は古天童に存し、卵形の塔であるという。

二十世は慈航了朴（模）で、十九世の應庵曇華がわずか住持一年たらずで示寂したのが隆興元年（一一六三）六月十三日であり、そのあとに住持したのである。二十一世の密庵咸傑が太白名山天童景德禪寺の受請上堂をしたのが、淳熙十一年（一一八四）の正月であり、了朴の行状は不明ながら樓鑰が一坐二十年というように、一一六三一一八四年の間住持していたと思われる。その間の淳熙五年（一一七八）に「太白名山」の宸翰を賜わった。また超諸有閣を建て、廬舍那閣の前に複道を造った。語錄なども存したようであるが現存せず詳細は不明である。

榮西と二十三世の虛庵懷敞の話は有名であるから、ここで重ねて述べる必要もあるまい。危素の碑銘が十四年とするの

は、十六年（一一八九）の誤りであろう。栄西が送った日本の木材で千僧閣が重建されるのは、紹熙四年（一一九三）九月のことである。

その後多くの禅者が住持するが、長く住持することはなく、五山制度も確立されていったと考えられる。その間前述した道元禪師が三十世の無際了派と、三十一世の長翁如淨⁽⁴⁵⁾に参ずるのである。

三十九世の西岩了慧⁽⁴⁶⁾が入寺したのは語録によると淳祐十二年（一二五二）十一月十五日であるが、行状では五年目の宝祐四年（一二五六）に寺院が火災を起し、半日にして鳥有に帰したとある（続藏經卷一二二一六九a・一八六a）。復興を計つて努めたが、病氣に成り、兄弟弟子の別山祖智⁽⁴⁷⁾に後事を任せ退くのである。吳潛の奏請により了慧の跡を継いだ別山祖智は、寺志卷七の塔銘によると、全焼した天童山を三年にして宝祐六年（一二五八）に再建したのである。千仏宝閣を建てたのは、四十二世の簡翁居敬で、景定四年（一二六三）のことである。四十四世の環溪惟一が咸淳九年（一二七三）の三月十一日に入院して一年もたたないうちに再び火災になり、復興に努めたことを語録や行状は記している（続藏經卷一二二一六二c・六三d・七九a b）。

四十七世の東岩淨⁽⁴⁸⁾は、大德四年（一二〇〇）に天童に住した。翌年、成宗皇帝より千仏閣に朝元宝閣の額を賜つたので

ある。淨日は三十九世西岩了慧の弟子である。西岩了慧は無準師範の弟子であるが、天童山には多くの無准下の禅僧が住持しており、四十世別山祖智・四十二世簡翁居敬・四十四世環溪惟一・四十五世月波普明の計五人がいる。その五人のうち了慧と惟一の住持中二回の回禄にあうという不幸に出合つた。しかしながら復興はその一門で為し遂げられたのである。この不運が三たびおとずれるのである。天暦二年（一三三九）に朝元閣が燐けるが、その間の詳細は不明としても、天暦二年十二月一日に入寺するのは、東巖淨日に嗣法した平石如砥である（続藏經卷一二二一九一d）。これらの復興は長くかかり危素が撰した碑銘が、その復興を記すのであって、五十八世の原明元良の時に完成するのである。

それ以前に曹洞宗宏智派の雲岫⁽⁴⁹⁾が四十九世に住し、平石如砥を経て、至順元年（一三三〇）に広慧妙悟智宝弘教禪師の賜号をえている浮中懷信が、至正五年（一三四五）に新しい仏殿を建立するのである。また至正二年（一三四二）に仏日圓明普濟禪師の号を賜つた雪窓悟光（一二九二～一三五七）が晩年育王と兼務している。

五十八世の元良の復興後には、明代になり洪武二十五年（一三九二）に天童禅寺と定められ、天下禪宗五山の第二とされたのである。永樂二年（一四〇四）には仏龕・盤山の二山が天童寺に合併され、洪武十五年（一三八二）に仏朗禪師の号を

賜つた湛然自性や永樂十三年（一四一五）に弘慈普応禪師の号を賜つた淨觀が住し、宣德元年（一四二六）に宣宗に召されている。宣德三年（一四二八）には寺が火災に遇うが、宣德七年（一四三二）には円燈が殿閣を重建している。また宣德九年（一四三四）には祖渙が宣宗に召されている。

補足として住持の世代にない仏国惟白と心鏡藏奨について

一言付すと、惟白は『建中靖國統灯錄』三十巻を編集した人として有名である。普灯錄などの灯史類には天童山に住したことは記さないが、寺志には東京法雲寺に住する以前に、天童に住したとし、寺志卷四には、統灯錄の徽宗皇帝御製の序を収めている。また天童山に寧波から入る時に小白嶺頭を過ぎるので、必ず鎮躰塔を目にとめるとされるが、唐の会昌年間、心鏡藏奨が建てたもので、現存のものは大正七年の関野博士の調査したものと大正十一年の常盤博士の時は近代的様式に変化していたと報告されている（『支那佛教史蹟評解説』法藏館一四三一～一四四〇）。『天童統志』巻上に住持文質が民国九年（一九二〇）に鎮躰塔を重建したとあるのが、これにあたるのである。この鎮躰銘のすぐ近くに大慧宗杲と宏智正覺が出合った時に、互いに座席を譲りあつた美談にちなんで建てられた揖讓亭が存する。

以上宋元時代の天童山を概観して來たのであるが、一宗派によつて維持されることもない中国禪林では、時の住持によ

つて大きく変化し、日本の禪林に問題となつた伽藍法は全く考えられないのであるから、長い期間に渡つて住持世代が明確にならないし、またその意識があいまいな所にかえつて中國禪林の一面の特色を示しているといえよう。

三 明末の天童山の復興

近年の天童山を問題にする時、密雲円悟（一五六六～一六四二）とその会下の人たちをあげることは誰も疑問はないであろう。密雲円悟は臨済宗の無準師範下の雪巖派に属し、雪巖祖欽（？～一二八七）—高峰原妙（一二三八～一二九五）—中峰明本（一二六三～一三三三）—千巌元長（一二八四～一三五七）—萬峰時蔚（一三〇三～一三八一）—宝蔵普持—虛白慧昌（一三七二～一四四一）—海舟普慈（一三五五～一四五〇）—宝峰明璗（？～一四七二）—天奇本瑞—無聞明聰（？～一五四三）—月心德寶（一五一二～一五八一）—幻有正伝（一五四九～一六一四）と承ける人である。日本へ渡來し、江戸期の佛教に大きな影響を与えた黄檗宗の開祖隱元隆琦（一五九二～一六七三）の師翁に當る。つまり隱元の師の費隱通容（一五九三～一六六一）は密雲円悟のすぐれた弟子の一人である。

まず密雲円悟の略伝を示しておこう。円悟の伝記を述べるものには、明藏に入藏した語錄十二巻に附された王谷撰の『行狀』、徐之垣譜の『全身塔銘』、唐世濟譜の『遺衣金粟塔

銘』、韋克振撰の『崇禎癸未夏月穀旦本山住持嗣法弟子通容樹石道行碑』および道恣撰の『天童密雲禪師悟公塔銘』（『牧齋有学集』卷三十六所収および寺志卷七）や道恣撰の『明天童密雲悟和尚行狀』（『布水台集』卷十六所収）がある。灯史類では、『続灯存稿』卷十、『五灯会元統略』卷八、『五灯嚴燈』卷二十四、『高僧摘要』卷一、『續指月錄』卷十八、『續灯正統』卷三十一、『五灯全書』卷六十四など多数存するのである。また語錄卷六には、円悟六十歳の時の自序伝である『行絲』もあるから、若い頃の最も詳細な記録にもなるのである。

師は諱を円悟、号を密雲という。江蘇省常州府宜興県の人である。宜興の荊谿とか陽羨と詳細に示した記録もある。俗性は蔣氏で、父は曠、母は潘氏で、季の子として、嘉靖四十五年（一五六六）十一月十六日丑時に生まれた。八歳で念佛し、十五歳で躬ら耕して親を養つた。二十六歳にして『六祖壇經』を読み宗門向上の事を慕つた。二十七歳にして山に上り作務する時省有り、二十九歳の十二月出家を決心して、妻を棄て、三十歳の正月に顯親寺で幻有正伝を礼して師とした。年譜によると、酒や女におぼれたようで、十六歳で妻をもつてている。それだけに回心と出家にはみなみならぬ決意がうかがわれるのである。正伝は、学道勇銳にして、志の徹悟を期して、円悟という名を命名したという。この年の春、正

伝は荆溪の竜池山禹門禪院に移るので、円悟も随つた。三十一歳で薙染し、三十三歳で僧服を納めるのである。円悟は僧臘四十四歳であるからこの年具足戒を受けたことを意味するのである。翌年三十四歳の時掩闋し千日で大悟を期するのである。千日終えた三十六歳の冬に閑を開くが、その間に幻有と往還酬答するも、師は許可しないのである。

三十七歳の万暦三十年（一六〇二）に、幻有が燕都に移り、円悟も随つて行き、監院を務めるのである。三十八歳の時に大悟するが、幻有の上堂と共に『行絲』に次のように伝えている。

三十七歲、本師將北往、以院事付受。当晚室中、擬拳話問大眾、我即向前云、和尚恁麼擬拳話、正好劈口大巴掌便出、雖然如是、只是恍恍惚惚、昭昭靈靈也。未得個安隱。一日自城帰過銅棺山頂忽覺、情與無情、煥然等現、覓纖毫過患不可得。大端說似人不得正。所謂大地平沈底境界。爾時恍恍惚惚、昭昭靈靈底、要起起不來、欲覓覓不得、不知甚處去了。又自密拳前所見所會、古人因緣、宛爾不同、亦不自疑道是与不是。（中華大藏經第二輯三七冊、語錄卷六一一四丁左）

これによると、師の下を離れ、三十八歳の秋に銅棺山（江蘇省宜興県か）において大悟したことがわかる。四十歳になつて報恩円修とともに正伝に省観するために燕京に行き、正伝の住していた普照寺に留り、新しい会処について問答応酬し、師資相い契うのである。四十二歳になり正伝と別れて、南下

し、双径・天台・禹門を過ぎる。その間、周海門居士や陶望齡、王舜鼎と相い問答した。円悟の法道これより海東に広まつた。万暦三十八年（一六一〇）の秋、幻有正伝が燕京より南來して、竜池山禹門禪院に再住することになり、翌年の四十六歳の時竜池に尋ねた。この竜池で幻有は鼓を撻つて大衆を集め、円悟に衣払を付した。円悟が四十九歳になつた時、幻有正伝が二月十二日に示寂し、心喪伴柩すること三年にして、万暦四十五年（一六一七）四月十五日、衆に請われて竜池山禹門禪院で開堂した。円悟五十二歳の時である。

天啓二年（一六二三）に天台通玄寺に請われ、竜池を離れ、九月に吼山護生庵に憩つている折、費隱通容が尋ねて証契す。

天台通玄寺に至つたのは十二月で、翌天啓三年に天台山通玄寺（開山は天台徳韶）で開堂した。天啓四年三月には、檀越の蔡聯璧の請により嘉興の金粟山広慧禪寺の住持を受け、五月六日入院上堂している。三十三歳の若き隱元隆琦が密雲を尋ねたのは、翌年の天啓四年のことである。崇禎二年（一六二九）に福建の黃檗山万福寺の請を受け、九月に竜池に帰つて伝和尚の塔を掃し、翌崇禎三年三月二十七日に黃檗山万福寺に入院し、四月十五日に開堂す。黃檗は永くいづ、崇禎四年元日には鄧山育王広利禪寺の請を受け、二月三日入院、十五日に開堂するのである。

明末清初の天童山と密雲円悟（石井）

垣、徐有杞居士らに請われて、天童山景德禪寺に住持することを受け、四月三日に入院上堂し、五月に嘉興金粟山広慧禪寺に再住し、八月天童山に帰る。天童住山中の天童復興については後述する。崇禎十四年（一六四一）には南京の大報恩寺の請があつたが、衰老をもつて辞退した。九月には天童山からも退き、翌年の崇禎十五年（一六四二）正月十四日には天台の通玄寺に至る。この年の七月三日に微疾を示し、七日の午時に方丈に帰り、寝榻に登りて臥し、少頃にして起つて跏趺坐して示寂した。世寿七十七、僧臘四十四である。天台と天童の両処に塔を建て、天童の塔は南山幻智庵の石躰に建てられた。

嗣法の弟子として大鴻（五峰）如學（⁵⁰一五八五～一六三三）、萬峰（漢月）法藏（⁵¹一五七三～一六三五）・東塔（破山）海明（一五九七～一六六六）・天童（費隱）通谷（一五九三～一六六一）・金粟（石車）通乘（⁵³一五九三～一六三八）・寶華（朝宗）通忍（⁵⁴一六〇四～一六四八）・禹門（万如）通微（⁵⁵一五九四～一六五七）・廣潤（木陳）道恣（一五九六～一六七四）・雪竇（石奇）通雲（⁵⁶一五九四～一六六三）・古南（牧雲）通門（一五九九～一六七二）・報恩（浮石）通賢（一五九三～一六六七）・通玄（林野）通奇（一五九五～一六五二）の十二人が大いに禪風を振つたとされる（王谷の行状・徐之垣の塔銘・年譜・天童寺志所収の錢謙益の塔銘など）。ところが陳垣氏の『清初僧諍記』や忽滑谷快天博士

の『禅学思想史』下巻に示されているように、勢力の争いにより、師資や弟子間で醜い闘諍があつたのである。この問題はここでは複雑があるので、別の機会に述べたい。

円悟の略伝を述べたので、天童山の円悟やその弟子たちの復興について考察してみよう。その間の事情については、康熙二十五年（一六八六）に刊立された重興寺碑が最も参考になると思われる。司農蜀遂の李仙根が撰した『重興寺記略』で寺志卷二に収められているので、まず次にそれを紹介することにしたい。

天童自義興以来、建幢繼席、雷無歇響、炬列長紅。盍亦徧世界、妙嚴闡化、選仏之場、未有繩繩奕奕、若斯之盛矣。迦文舍利、出

太康之三年、至義興開山纔十九年、則是仏出八万四千之一、以鎮曜南天、而義師即以全身福慧光、啓山靈鷲鳴谷、應符証明確、宜其為金庭英藪、莫可比侔也。自唐宋及元明、屢有興替、皆因維締構往往廢、不久而即復。蓋天人合廢、不使少有墜湮若此。万曆

丁亥秋、忽值竜怒、風雨驟臻、傾蕩就尽、四十余年、莫克維新。夫以山之名勝、如彼歷世、諸天人鬼之所瞻護。如此一竜也、昔以仁今以暴、昔可以化馴、而今独以怒。逞哉。天下之廢興一也。有小廢也小興。欲其大興也則必有大廢。竜之為物至神、夫固知法王再造之有屬矣。崇禎戊辰、迎密雲悟禪師、於金粟未果行。又三年

傾企申請、乃至當是時一壑荆榛、崇丘敗壁耳。師乃不惜肝腦、觸機披瀝、運正法味、應衆飢渴、頓令縉素雲集、財力輻合。自入山三年、稍有建置、後以海舶致材于閩者、再於乙亥歲、成天人師殿、次天王殿、及法堂・大小方丈、其余堂則有先覺・雲水・新

新・東禪・西禪・東客・西客・應供・延壽、樓閣之大者則藏經・回光・返照・鐘及庫司外、復有小者三、至于廊・寮・房・室、凡有名者、二十有三、以次建置焉。其激于池者殺之、衝于溜者是之、艱于渡者橋之、塔廟表之、江埠院之、山場莊業茶亭松閑、無一非師隨意擘画以成者也。若夫搏土刻木、範金施繪、瑞光備現于鬼斧神工。猗歟、百千万祀之仏海哉。師以壬午秋示寂。所付嗣十二人。繼住者、木陳恣・費隱容・林野奇・牧雲門・浮石賢。順治丙申、恣公重応住持、乙亥、蒙世祖章皇帝、欽召稱旨錫號弘覺禪師、而悟公語錄、愈入大藏、恩賜倍隆洵希世之遇也。恣公去付弟子遠菴儕公、一紀付山曉哲公。公固昔所侍応召追隨禁廷者也。公子遠菴儕公、一紀付山曉哲公。公固昔所侍応召追隨禁廷者也。公承師志、殫輯寶積諸錄、復綱繆堂構繼述、可謂善矣。茲哲公以寺重興、未有備記、屬之仙根。（以下略）（三七丁b～二八b）

この記について補足することにしよう。まず寺志やこの記を中心に、各個人の語錄を参考にして、密雲円悟を仮に中興一世として、密雲住持より約百年の世代を列記すれば次のようになる。

中興一世密雲円悟・二世木陳道恣・三世費隱通容・四世林野通奇・五世牧雲通門・六世浮石通賢・七世遠菴本儕・八世山曉本哲・九世柏堂元靜・十世慰弘元盛・十一世天嶽本暉・十二世偉載元（超）乘

中興一世の密雲円悟が天童山に住持したのが崇禎四年（一六三二）の四月で、十二世の偉載元乗が天童山で示寂したのが雍正二年（一七二四）の三月十八日であるが、この間すべて密雲の系統で住持が続けられたのである。その後については

詳細は不明であるが、天童山史の中でも例をみないものである。密雲の弟子の十二人⁽⁵⁸⁾のうち、八番目の道恣⁽⁵⁷⁾・四番目の通容・十二番目の通奇⁽⁵⁹⁾・十番目の通門・十一番目の通賢の五人が住持し、道恣・通賢が再住して、道恣の弟子の遠菴本儕⁽⁶⁰⁾（一六二三～一六八二）と山曉本哲⁽⁶¹⁾（一六一〇～一六八六）がつづいて住し、本哲の弟子の柏堂元靜⁽⁶²⁾・慰弘元盛が継いで、再び道恣の弟子の天嶽本昼⁽⁶³⁾（一六一二～一七〇五）が住し、示寂後、本昼の弟子偉載元乘⁽⁶⁴⁾（一六五一～一七二四）が継いでいる。その間、康熙二十一年（一六八二）十一月に庫司樓が火災になつたが、すぐに本哲が重建しており、現在知られる昭和の初期までの建築は、法堂が乾隆二十一年（一七五六）に焼けて、嘉慶十六年（一八一）に敏菴が重建し、下院が咸豐十一年（一八六一）に焼け、同治三年（一八六四）に広昱が修復し、西桂堂が光緒十一年（一八八五）に焼け、淨禪が修復した以外は、大部分の建築は密雲一派によつて造られたのである。近年まで見られる天童山がほとんど重修など経てはいるが、基礎はみな密雲一派によるものである。その間の事情を住持年次の順にみてみよう。

万曆十五年（一五八七）七月二十一日に天童山を襲つた大洪水は、全山を廢墟と化し、宏智・慈航・虛庵・東岩・原明の遺跡は、土砂に埋もれたのである。この復興は永く出来なかつたのであるから、その被害の大きさは想像絶するものであ

つたのであろう。密雲円悟が、崇禎元年（一六一八）に天童山の住持を請われた時も最初は受けなかつたし、崇禎四年に住持を受けた時も、大衆に天童に住すべきか、金粟に住すべきか質問したところ、大衆が天童への住持を大いに勧めたので決心したと年譜は伝えている。金粟は、密雲が大禪林にふさわしく殿堂を整理したのであるから、壇越などの勧めに辞することができなかつたのであろう。この年四月に一度天童山に住持し、翌月の五月に壇越などとの約束で金粟に再住し、八月に天童に帰るという多忙な日程がその間のことを伝えてゐる。

八月に天童山に入ると復興に着手し、崇禎五年（一六三二）に『天童寺志』を編纂している。崇禎八年（一六三五）住持して四年後に、仏殿・天王殿について法堂・先覺堂・藏閣・大方丈が落成し、大伽藍の主要な建物が備わるのである。仏殿は七間六面、重層入母屋造の堂々たる大建築と報告されてゐる。閔・常盤両博士のみられたもので、寺志にも、七間、高さ九丈六尺、縱十一丈、広さ十三丈五尺とある。

崇禎九年（一六三六）には雲水堂・應供堂が建ち、また延寿堂が建つてゐる。崇禎十年に西禪堂・東西両客堂が建ち、崇禎十三年に東禪堂・鐘樓・新新堂・廻光閣・返照樓が建つてゐる。この間に東西両廊・香積厨・俗室を構え、庫司樓・西客樓・藥料樓、首座寮・頭首寮・知客寮・化主寮・典座寮・

雜務寮・什物寮・浣濯寮および碓房・磨房・茶房・小菜房・収飯房・礎房・田房・園房・柴房・頭口房・圓房が完備し施設器具も備つたのである。天王殿を一步外に出ると内方工池と外方工池が築かれ、その二つの池の間に七塔が造られたのである。

崇禎十四年（一六四一）に『天童寺志』が重纂されており、この年九月退いて、天台へ向い翌年の七月七日に天台の通玄寺で示寂したことは前述のごとくである。

以上みたごとく、崇禎四年四月三日に入院上堂してより、崇禎十四年九月に退くまで、十年間、密雲円悟の天童山復興の事業はまことに驚嘆するものがあるといえよう。師の語録入藏については後に述べることにする。

師の密雲円悟について住持したのは、八番目の弟子であった木陳道恣であった。木陳道恣には明統藏に收められる『天童弘覺恣禪師語錄』二十巻と共に『天童弘覺恣禪師北遊集』六巻があり、その外に『布水台集』三十二巻が存するが、幸いに台北の中央図書館本が中華大藏經の第二輯第一〇二冊に明統藏本と共に一冊に收められて見ることができる。語録卷一によると崇禎十五年（一六四二）の冬に受請し、翌年二月七日に院事を主り、二月十五日に開堂している。天童より明州慈谿五磊山霧峰禪寺に移るのが、一六四六年の四月頃のことと推測されるから、その間三年ばかりの住持であり、特記することはないが、天童山に密雲円悟の名を高からしめたのは、

実は道恣の功績によるのであって、それは道恣の再住の時であるから、そこで述べることにしよう。

道恣に次いで住持したのは隱元隆琦の師の費隱通容である。費隱通容には中華大藏經の第二輯第一〇一冊に收められる『費隱禪師語錄』十四巻の外に、駒沢大学図書館には、大阪府慶瑞寺にある『費隱禪師別集』五冊の写本がある。語録卷四および語録に付された『福嚴費隱容禪師紀年錄』によると、順治三年（一六四六）の八月十一日に金粟で天童景德禪寺の請を受け、十月十一日に入院、開堂している。語録卷五には、順治六年（一六四九）九月八日に松江府華亭県の超果寺の請を受け、十月二十七日に入院・開堂しているから、この年の解夏の後の秋に天童山を退いたものと思われる。天童山の三年間の住持時代において費隱が意を注いだのは、東谷を復興し、南山を清理したことである。東谷は古天童といわれる所で、宏智正覚の塔が存し、南山は密祖塔院の存する所である。水害で荒れた田が三百余畝ももとに戻り、寺院經濟の復興に大いに役立つたのである。

中興密雲より数えて四・五・六世にあたる密雲の弟子の林野通奇・牧雲通門・浮石通賢は、十二人の弟子の中で最も後輩に属する人達である。三人に関しては中華大藏經第二輯第一〇三冊に『牧雲和尚七会余録』六巻、『浮石語錄』十巻および『林野奇禪師語錄』八巻がそれぞれ存する。林野通奇が

費隱通容のあとに住持したのは、語錄卷四や語錄に付された曹勲の撰する『天童林野奇和尚行狀』によると、順治七年（一六五〇）の五月三日であり、その日に開堂を行つてゐる。住すること二年もたたないうちに、病に倒れ、行狀や道恣の撰する塔銘および行謚の撰する跋が示すように、順治九年（一六五二）三月二十九日に示寂してゐる。通奇示寂後に住したのは、牧雲通門で順治九年（一六五二）に住し、順治十一年（一六五四）に退いたと寺志で伝えており、天童より秀峰に移つてゐる。同じく寺志には浮石通賢が通門の天童を退く際に推薦されて住したとあり、通賢は順治十四年（一六五七）には秀州の棲真寺に移つてゐる。通門・通賢共に長く住した訳ではなく、通門が二年、通賢が三年のことである。

約三百年に渡つて続いた明も終りに近づき、一六六一年に完全に滅亡したが、通賢の後に再住した木陳道恣は、清朝の世祖に庇護を受け、天童山は一躍発展したのである。道恣が再住したのは、順治十四年で、この年天童山に輦屋を建てている。

住して三年後の順治十六年（一六五九）閏三月に世祖に召され、九月十七日に天津に至り、二十二・二十三日万善殿に進み、皇帝に奏対し、天童密雲および道恣の経歴を述べてゐる。その後十月十五日・二十八日・二十九日・十二月十五日、翌年の正月二日・三日・十一日・三月十五日・十六日・二十三

日・二十四日・四月一日・六日・二十三日・二十九日・五月七日・八日・九日・十三日・十四日と多くの日に奏対していって、その間の記録が中心となつて『天童弘覺恣禪師北遊集』六巻として残つてゐる。順治十六年には天童景德寺に弘法寺の寺額を賜わり、順治十七年四月には密雲下で始めて弘覺禪師の号を清の世祖より賜つてゐる。衣を賜わつたものは、密雲圓悟が崇禎十四年、道恣が順治十六年十月、順治十七年春、夏および冬と順治十七年に道恣に隨行した弟子の本哲である。道恣が皇帝の下を辞し天童山に帰つて後にも、弟子の本月と木哲は皇帝に留められて、それぞれ善果寺と隆安寺に住してゐるのである。

道恣の功績の中でも大きなものに、密雲圓悟の語錄の入蔵がある。寺志卷四や『布水台集』卷十七の奏疏に

道恣、伏見、宋景德年中、僧道原所著伝灯錄三十巻、頒降入蔵。
元祐間、明教禪師契嵩所著輔教編三巻及伝法正宗記一十二巻、亦賜入蔵。乾道七年、僧蘊聞所進大慧禪師宗果語錄三十巻、亦賜入蔵。元元統二年、僧善達密的理所進其師普應國師明本語錄三十巻、皆賜入蔵。（以下略）

とあつて、道原・契嵩・大慧・明本の四人と同様に師の語錄の入蔵を請うてゐるのである。『北遊集』卷四に入蔵についての問答が記録されているが、北蔵の修理が出来ていないので、大報恩寺で行つてゐる南蔵で先に流通することを希望し、

北蔵が修理された時に北蔵でも刊行することを許可されている。『密雲禪師語録』十二巻と道恣の編する年譜六十二帙を願っているが、現存する明蔵の中では、『古尊宿語録』四十八巻などと同様に密雲語録は「北蔵欠南蔵号附」として取り扱われている。中でも年譜が同一でないものもあり、北蔵も

存したと思われるが、北蔵は私はみていない。四人以外にも実際には禪録は入蔵しているが、疏にあるごとく、大慧・中峯と共に入蔵された語録として密雲の語録は、入蔵過程に由緒を持つものといえるし、明蔵の正編に重要な地位を占めるものである。道恣の後に道恣に請われて浮石通賢が再住したと寺志にあるが、長くはないと思われる。道恣が召されて天津に行く時、通賢が住持したと考えられる。

道恣の弟子の遠菴本儕には、中華大藏經第二輯第一四六冊に『遠菴禪師語録』十六巻が存するが、語録卷四によると順治十八年（一六六一）六月に漳州神鼎山資聖禪寺より天童山を尋ねたところ、天童山の住持が退休する時で、請われて住持したのが、七月一日である。卷七では明州瑞巖開善寺の受請が、康熙九年（一六七〇）四月で、康熙十一年（一六七二）三月に實際は入院し、翌年十月に開堂したとある。順治十八年に住持したことは語録に付された謝兆昌の撰する塔銘にも記すところであり、寺志卷三に天童を主ること凡そ十二年とあって、實際は十一年も満たないにしても、長い住持期間であ

つた。その後も道恣の弟子の山曉本哲が康熙十一年に住したと寺志の伝にある。木哲の住持は最晩年に病氣になつて弟子の柏堂元靜に席を譲るまであり、示寂が康熙二十五年（一六八六）の十一月であるから、十三年から十四年の住持となつていている。

この間の天童山についてみると、木陳道恣が順治十七年（一六六〇）に世祖より帑金千両を賜つており、これにより仏殿を修理している。遠庵木儕になって知浴寮を建て、康熙七年（一六六八）に道恣が賜つた像や宸翰の書画を藏した客堂の奎煥樓が建てられた。この楼については常盤博士の報告に詳しい。本哲が住してすぐの康熙十三年（一六七四）の六月二十七日に師の道恣が会稽の平陽で示寂するが、その後、康熙十四年（一六七五）に郭一鳳の布施による経蔵が備り、康熙十五年に『宝積錄』九十三巻を編集し、それを収める宝積堂を建て、康熙十八年に奎煥樓のうしろに御碑亭を建て翌年古山門を建て、輶屋を増進した。康熙二十一年（一六八二）十一月庫司樓が火災になつたが、木哲が前より大きなものを重建し、翌年も殿堂を重修し、外も万工池を濬築し、中峰菴や暁秀軒を重建した。康熙二十三年（一六八四）になつても、東谷菴や普同塔院を重建し、密祖南山塔院を修したのである。本哲の内外の大整備の記念が、前に引用した康熙二十五年（一六八六）に刊立された重興寺碑である。

天童山の最盛期は本哲までであり、次いで本哲の弟子の柏堂元静が、本哲の寂後を守龕し、柏堂が病の後、約八年間、同じく本哲の弟子の慰弘元盛が継いだ。その間、康熙三十四年（一六九五）に經藏閣が焼失した。元盛の跡を継いだのは、道恣の弟子の天嶽本昼で、康熙三十五年（一六九六）のことである。康熙四十年（一七〇一）には仏殿を重修し、康熙四十二年に香清梵の匾額を賜った。本昼の示寂は寺志によれば康熙四十四年（一七〇五）の冬であるが、その年の春には弟子の偉載元乗に席を譲っている。この師資によつてであろうが、密雲円悟に慧定禪師の諡号を、この年に賜わっている。偉載は焼けた經藏閣を翌年重建し、南山塔院を修理し、康熙五十二年には梵本經藏を請い、翌年外山門を重葺し、大仏像三体と羅漢像の重飾を行つてゐる。元乗の住持は一六一二年の春に一度住し、再住して、雍正二年（一七二四）三月十八日の示寂まで住したようで、示寂は天童山であると『天童統志』にあるが、再住の間の詳細については不明である。

四 おわりに

密雲円悟が天童山に住した一六三一年よりおよそ百年の密雲派下の天童山の復興は、その後二十世紀の初めに盛んに重修されて維持されて來た。現在の様子については改めて報告したいと考えてゐる。

さて今回資料とした『天童寺志』は、密雲円悟の功績を集めた崇禎十四年（一六四一）の『重纂天童寺志』十卷を増補重修した康熙年間の新纂になるもので、駒沢大学図書館本は後刷りの時嘉慶十六年（一八一一）の記事も挿入している。天童寺志は、宋代の乾道五年（一一六九）に張津などの撰する『乾道四明図經』十二卷や紹定元年（一一二八）に羅濬などの撰する『寶慶四明志』二十一卷を参考して、嘉靖四年（一五三五）に鄞隱士白川楊明の『天童寺集』七卷の編集にはじまり、万暦年間に住僧無憂万懽の増編を経て、密雲時代の崇禎五年（一六三二）に『天童寺志』五卷を編纂したのに基づき、増広改編されたものである。『天童寺統志』は民国九年（一九二〇）に編纂されたもので、寺志の後を補うものである。

天童山に多く住したすぐれた禅者の宗風や天童山の經濟状態およびそれを支えた人々を今後研究すると共に、天童山史の不明の部分も五山を中心天童山と同様に研究していくならば、補足しえるものも多くあるかと思われる。⁽⁶³⁾一つの天童山という場所を設定し、長期間に渡つて足跡をとどめた禅者を追つていった今回の論文で、強く感じたのは、日本の禅寺と全く異質の部分である官寺としての性格である。紙教も限りがあり、全般に渡りえなかつたが、時代ごと住持ごとの禅林生活をみてみると、宗派と寺院との無関係、つまり日本的な意味での宗派の考え方が全く通じないことがより一層

理解されると思われる。諸種の研究課題を残しながら、中国行きのメモを作成したのが今回の論文である。

1、洞山良价（八〇七～八六九）に嗣法す。『景德伝灯錄』卷一

七の目録。（大正蔵経卷五一～三三四a）

2、雲門宗の智門光祚（一〇三一寂）に嗣法す。『建中靖国統灯錄』卷三の目録。（続蔵經卷一三六一一b）

3、雲門宗の五祖師戒に嗣法す。『建中靖国統灯錄』卷三。（同、三三一d）

4、法眼宗の崇寿契稠（九九二寂）に嗣法す。『天聖広灯錄』卷二八の目録。（続蔵經卷一三五一三〇二d）

『四明尊者教行錄』卷四に往復書簡のみえる人で、その中に子凝が『祖堂集』について言及している。（大正蔵經卷四六一～八九四b以下）大学院博士課程の鈴木宜邦氏の御教示による。

5、雪賣重顕（九八〇～一〇五二）に嗣法す。『建中靖国統灯錄』卷五の目録。（前掲書、三d）。塔が玲瓏巖の西に存した。

6、法眼宗の帰宗義柔の弟子か。『天聖広灯錄』卷二六。（前掲書四三三c）寺志は慶曆中（一〇四一～一〇四八）に住持する瑞新とし、瑞新は雲門宗の福昌重善の弟子で、二人の混同があり、九世以前は帰宗下であろう。（参照、『続灯錄卷三』）

7、天童山に住したと思われる人に、雲門宗の雲居曉舜の弟子に澹（淡）交がいるが、年代的に合わない。『嘉泰普灯錄』卷三（続蔵經卷一三七一四〇c）

8、法眼宗の帰宗義柔に嗣法す。『天聖広灯錄』卷二六（前掲書四三五b）

9、臨濟宗の石霜楚圓（九八六～一〇三九）に嗣法す。『建中靖

国統灯錄』卷七（前掲書、五九d）

10、雲門宗の慧林宗本（一〇二〇～一〇九九）に嗣法す。『建中靖国統灯錄』卷一五（同、一一四c）。塔が寺の西に存した。

11、黄竜派の泐潭応乾に嗣法す。一二四年三月二十日示寂するまでおよそ十年は天童山に住し、宏智以前の天童山を整備した人である。

12、黄竜派の心聞曇賛に嗣法す。咸傑の示寂の一八六年六月十二日示寂のあと住し、懷敵が住する一八九年の前まで住していたのであろう。

13、楊岐派の大慧宗杲（一〇八九～一一五二）に嗣法す。弟子の笑翁妙湛が参じた一二〇〇年頃住持し、一二〇七年六月二十九日の示寂まで住持したと思われる。塔は応菴の塔の左に存した。

14、楊岐派の淨慈師一（一一〇七～一一七六）に嗣法す。淨全の寂後より、一二二二年七月二十七日の示寂まで住持す。

15、大慧派の仏照德光（一一二一～一二〇三）に嗣法す。伝記については、石井修道「仏照德光と日本達磨宗」（『金沢文庫研究』第二十卷第十一号・十二号）を参考されたい。天童山住持は達觀のあと一二一七年頃まで住持したのであろう。

16、楊岐派の或庵師体（一一〇八～一一七九）に嗣法す。

17、大慧派の仏照德光に嗣法す。塔は西崖の弁山の塔の南に存した。

18、塔は寺の西の慈航了朴の塔の右に存した。

19、虚丘派の密庵咸傑に嗣法す。塔は中峰の密庵の塔の左に存した。

20、寺志では曹洞宗の華藏慧祚に嗣法すとするが、天童山との関係は詳細は不明。塔は中峰の麓に存した。

21、虚丘派の曹源道生に嗣法す。一二三九年十月三日に入院し、一二四四年まで住した。

22、虚丘派の松源崇岳（一一三二～一二〇一）に嗣法す。舍利塔が無用の塔の左に存した。

23、大慧派の浙翁如琰に嗣法す。一二五〇年十月十日に住す。塔は玲瓏岩の南に存した。

24、楊岐派の華藏善淨に嗣法す。塔は玲瓏岩の西南に在った。

25、虚丘派の運庵普巖に嗣法す。

26、虚丘派の無準師範に嗣法す。住持の期間は不明。

27、大慧派の偃溪広聞（一一八九～一二六三）に嗣法す。

28、虚丘派の虛舟普度（一一九九～一二八〇）に嗣法す。一三〇八年より示寂の一三一五年五月五日まで住持す。塔は中峰庵の後に存した。

29、密庵はわずか三ヶ年も住持しないが、後に述べるように明末に臨済宗によつて天童山が復興されたため、中峰に密雲円悟によって塔院が重修され、一六八三年山曉本哲によつて再び重修された。

30、応庵曇華も晩年の一年のみの住持であるが、唐譽の左隣に塔院が存した。

31、石井修道「攻媿集にみられる禅宗資料」〔東方宗教〕第三十九号）を参照されたい。

32、塔は東谷菴の左隣に存した。

33、塔は寺の西の普同塔の左に存した。

34、虚丘派で天童山四十八世の竺西妙坦に嗣法す。髪爪塔が中峰の枯禪の塔の左に存した。

35、虚丘派の竺元妙道（一二五七～一三四五）に嗣法し、了堂惟一と同門である。惟一が元良の次に住し、あるいは司聰が惟一の次に住したのかもしれない。司聰は一三六九年に住したと寺志にある。塔は寺の西麓に存した。

36、大慧派の玉溪思珉（一三三七寂）に嗣法す。塔は伏翠菴の前に存した。

37、塔が中峰の麓に存した。

38、塔が大嶺山辺に存した。

39、大慧派の無言本に嗣法す。塔が仏国菴の後に存した。

40、塔が東谷菴の山麓に存した。

41、虚丘派の月輝朗に嗣法す。塔は中峰の山麓に存した。

42、塔が妙光塔の旁に存した。

43、塔が新菴の後に存した。

44、黄龍派の育王介謙（一〇八〇～一一四八）に嗣法す。塔が寺の西の新菴上に存した。

45、道元禪師も『正法眼藏梅華』の卷に「先師天童古仏者、大宋慶元府太白名山天童景德寺第三十代堂上大和尚なり」と如淨が三十代であることを伝えているが、密菴二十代説が後に整理されたのであろうか。

46、塔が盤山下の幻智菴上山に存した。

47、塔が中峰の麓に存した。

48、塔が西巖の清風塲に存した。

49、竺西妙坦が示寂する一三一五年五月五日のあとを継いで住

し、示寂する一三二四年八月二十二日まで住したのである。塔は宏智の妙光塔の旁に存した。

50、中華大藏經第二輯第一〇〇冊に『大湧五峯学禪師語錄』一巻が存す。

51、同一三三冊に『三峯藏和尚語錄』十六巻が現存す。

52、同一〇一冊に『破山禪師語錄』二十巻が存す。

53、『石車禪師語錄』一巻が存するが、未見である。

54、前掲書一三四冊に『朝宗禪師語錄』十巻が存す。

55、同一〇三冊に『万如禪師語錄』十巻が存す

56、同『雪寶奇禪師語錄』十五巻が存す。

57、寿藏衣鉢塔が玲瓏巖下に存した。

58、塔が玲瓏巖の麓に存した。

59、舍利塔が南山幻智菴の右隣に存した。

60、塔が中峰に存した。

61、塔が幻智菴の後に存した。

62、塔が玲瓏巖の南の坟山隣に存した。

63、その外入宋僧・入元僧・入明僧の天童山住持の參學の師を調べていけば、住持年次の解説できるものもある。この点についてまだ十分な私自身の研究が、進んでいないが道元禪師や栄

西の外に、木宮泰彦著「日華文化交流史」（昭和三十年七月富山房）をみると、無修円証と西巖了慧、樵谷惟僊と別山祖智、約翁徳俊と石帆惟衍、玉山玄提と直翁徳拏、嵩山居中と雲外雲岫、伯英徳俊と了堂惟一などが確かめられる。